こだいら ちょっとむかし

手作りの暮らし

昔は、なんでも自分で作るのが当たり前でした。今年はその中から、特に衣服について、タマおばあさんに語ってもらう形で紹介します。

洋服・繕い物

今は必要な物は何でもすぐに買えるけど、昔は着る物も食べる物も、自分で作らなければならなかったの。

私が若かった頃、50年も60年も前は、洋服より着物を着ることが多かったんだよ。だから私らも、普段に着る着物や浴衣は手で縫うし、洋服も生地を買ってきて、家でミシンで縫ったの。

まちですてきな洋服を着ている人を見かけると、デザインを覚えておいて、似たような生地を買ってまねて作ったりしてね。

もちろん自分で作るから、そんなにうまくは出来ないし、手間もかかるけど、出来上がったときは本当にうれしかったよ。

子どもたちの下着もキャラコの布を必要なだけ買ってきて縫うの。キャラコというのは木綿の平織りの布だよ。下着は肌に直接着るものだから、縫い目が当たって痛くないように、なるべく平らになるような縫い方を工夫したね。

服も下着もいつでも作るわけじゃなくて、子どもたちがお正月や新学期なんかの特別のときに着られるように、新しい物を用意したの。それで新しいうちはよそゆきにするんだけど、古くなってくると普段着にしたんだよ。

昔はお兄さんやお姉さんの小さくなった服を弟や妹が着ることが当たり前だったの。お下がりの服は、大きすぎると、すそを上げたり、肩のところでつまんで縫ったりしてね。

体に合っていなくて不格好なんだけど、みんながそうだから、子どもたちも平気だったね。

お下がりは、いろいろなところが傷んでいて、すぐにすり切れて、穴があいてしまうの。だから夜なべ仕事に、夕飯の片づけが済むと、毎晩のように繕ったものだよ。

肘や膝が当たるところは、特に穴があきやすいから、初めに別布を下からあてがって縫うんだよ。虫に食われて穴があいてしまったところなんかは、フェルトをかわいらしい形にしてアップリケにすると、子どもが喜んだね。

私がたまに昼間に針仕事をしていると、子どもたちも針を持って、いっしょにお人形さんの簡単な洋服を作ったりしていたよ。それで小学校高学年にもなると、繕い物も自分でするようになったんだよ。

服だけじゃなくて、足袋や靴下も縫うんだよ。今では、靴下に穴があくと、すぐ捨ててしまうけど、昔は糸でかがって履いたの。かかとや指先、親指の付け根辺りによく穴があいてね。指先はつまんで縫ってしまうんだけど、かかとや親指の付け根のところは、靴下の中に電球を入れて、繕ったんだよ。そうすると縫いやすいの。

繕った靴下は縫い目が足に当たって、ごろごろして痛いんだけど、穴があくたびに繕って、履いたもんだよ。

着物、洗い張り

夜なべ仕事と言えば、繕い物だけじゃなくて、着物もよく縫ったね。新しい着物を縫うときもあるけど、縫い直しが多かったんだよ。

着物は夏用の単衣、冬用の袷があって、それぞれ季節が終わると、汚れがひどいものだけ洗い張りをしたもんだよ。縫ってある糸をほどいて、布に戻してから洗うの。洗った布は、板に貼り付けたり、伸子針でピンと伸ばして、のりを付けて乾かすんだよ。それを次の季節に間に合うように、着物に縫うんだから、大変な手間だったの。

上等な着物は洗い張り屋さんや染め物屋さんに頼むんだけど、普段着は自分の家で、洗い張りするんだから大変だったね。

着物から抜いた糸も大切に取っておいて、雑巾を縫うときに使ったんだよ。

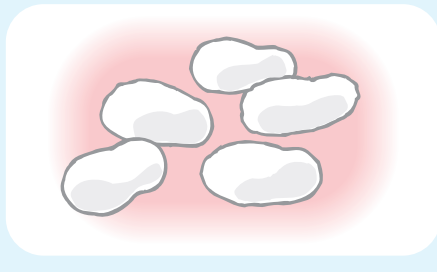
今は新しいタオルを下ろして、雑巾にしたりするけど、昔は古布で作ったんだよ。

傷んで着られなくなった木綿の服や下着などを、重ねて刺して、雑巾に縫ったの。

着物と言えば、明治時代から昭和の初め頃までは、小平は養蚕が盛んで繭をたくさん出荷していたの。だから自分の家で繭から糸を取り、機を織って、反物まで作っていた人もいたんだよ。自分の家で作った反物は家織りと言って、良い繭で作ることもあったけど玉繭やビション繭なんかの、売り物にならないような繭で織ることが多かったんだよ。

玉繭は大きな丸い繭で、2匹の蚕が一緒に一つの繭を作ったものなの。大きいから良さそうなものだけど、実は糸が節だらけなんだよ。ビション繭という、中で蚕が死んでしまった繭も、糸に染みが出ていて、売り物にはならないの。そういう物で、自分たちの着物を作ったんだね。

でも、絹だから、やわらかくて軽くて、着やすかったんだよ。



針山・お手玉

繕い物やら、着物を縫うやら、毎日、針を持たない日がないぐらいだったよ。だから、お針の道具は、いつも手の届く所に置いてあったの。

針を刺しておく針山は、気に入ったはぎれで自分で作るの。中に髪の毛を入れると、髪の油気で針がさびないでいいんだよ。

子どもの喜びそうな色や柄のはぎれは、お手玉にしたよ。お手玉の中身は古くなった小豆やエゴの木の実なんかを入れたの。2種類の布をはぎ合わせるお手玉もあって、なるべく違った色のはぎれを使うと、きれいなんだよ。

手作りの暮らしは大変だけど、作る楽しみと、それを使う喜びがあったんだね。

タマおばあさんのお話、いかがでしたか？
ご感想をどうぞお寄せください。

秘書広報課☎042（346）9505
編集・協力　小平民話の会

この市報は環境に配慮して、古紙配合率100％の再生紙、大豆油インキを使用しています。